

# 毎日が「信じられない」の連続



昨年10月5日、国会議事堂前を占拠した市民

## 留学中に私は見た—— ユーゴ政変の瞬間

### 強権政治を許すな 政治関心強い若者

私は昨年9月からことしの7月まで、ユーゴスラヴィアのベオグラード大学政治学部に留学していました。ユーゴという国は皆さんにとって、あまり馴染みのない国だと思います。ですから私個人のおかずか10カ月間の滞在ですが、現地の模様をお伝えしようと思います。

法学部政治学科4年

白鳥 亜由美

ベオグラードに到着した頃、街は選挙ムード一色でした。政治スローガンが書きつけられたポスターが至るところに貼ってありました。これは日本でもよく見かけますが、ユーゴでは政治の主体は若者たちです。無数の政党が混在するユーゴでは、ポスター貼りをしていただけで、警察に捕まるなど、「言論の自由」とは程遠い世界です。

朝、スーパーの前に行ってみたら、サラダ油と砂糖を買うために大勢の人が行列を作っていました。この選挙にミロシェヴィッチ側が勝利したら、放出しようという意図があったらしく、市場にこの2種類が回っ

ていなかったのだそうです。もちろん、値上がりしていましたが、見た時に買わないと、次はいつのなるのか誰も予想できないのです。私にとって、毎日が「信じられない」の連続でした。

現地通貨はディナールですが、市民は実際はマルクで生活しています。例えば、給料をマルク建ててもらい、両替所で必要に応じて両替しています。それほど自国通貨のレートが不安定なのです。

当時、一般人の平均賃金が80マルクでした。当然、生活できるはずはありません。そこで大抵の人は、朝8時半から昼の3時半までの勤務を終えてから、なんらかの副業を持っています。それでも一家で食べるのはやっと。一方で、政府と何らかのコネクションを持っている人は、日本の裕福な人よりも良い暮らしをしています。何もかもが政治コネクションで決まるお国柄なんです。

## 政府に対しあくまで 抗議行動に出る若者

そういう国ですから、政治に興味を持ち、自分たちの手で政治を変え

て、もっと良い生活をしたいと願う若者が立ち上がるのは当然のことです。選挙当日も日本では想像もつかないような光景を何度も目にしました。例えば、正当な理由がないのに、警察が投票所を閉鎖したり、選挙の不正をボランティアの市民が監視したり、私にとって何もかもが想像の域を超えるものばかりでした。

選挙が終了し、投票結果が出てから、ミロシエヴィッチ前大統領が結果を受理したものの敗北を認めず、混乱に拍車をかけました。街には市民のデモ隊が押しかけ交通ストを始めました。バスなどが運休するだけでなく、道路そのものが何万人もの市民によってブロックされてしまったのです。

# 通信網ズタズタ、 街覆う催涙ガス

その流れの向こうに、なにか白い霧のような煙が風に乗って、ベオグラードの街全体を覆い始めました。何が何だか様子が分からず、私は友人の部屋に避難して、じっと息を殺していました。彼女は情報を集めようと、懸命に電話を掛けていますが

焼き打ちされ放置された警察車



私は「こんなことをしても経済は、ますます悪化するし、5年前と同じように歯向かう者には、政府が軍と

繋がる気配はまったくありません。片手でラジオの周波数を合わせようとしても、まったく反応なし。彼女は私にテレビのチャンネルをほとんど切り換えてみると指示します。

するとニュース速報で催涙ガスが撒かれたことを知り、その煙は政府

警察を動かして、武力弾圧に出るに違いない」と思って、疑問を率直に友人たちにぶつけてみました。

彼らは笑って答えました。「確かにそうかも知れないけれど、いま闘わなかったら、なにも変わらないでしょう？ 政府はますます強権政治をするだろうから、こうやって抗議行動に出るしか方法はないのさ」。

時間が経過することに街全体に緊張が増し、反政府派の人びとが抗議のためにセルビアじゅうから首都に集まり、何かが起こるといふ空気がなってきました。政変があった10月5日も、いつもと変わらず、大勢の市民がデモをしていました。午後1時すぎ、議会の前で、にわかに騒ぎが大きくなりました。

による弾圧の第1号だったことを知りました。あとで知ったことですが、政治的混乱が起きると、政府は電話線やラジオも意図的に乱すことがあるそうです。

私たちが情報集めに苦心していた時は、政府系テレビ局の前でデモを

していた市民と警察が睨み合いとなり、威嚇発砲があったものの、軍も警察も市民に武器を渡し、政変の幕は閉じました。この場に登場した市民は決して過激派ではなく、ほとんどが普通の学生やサラリーマンたちです。だからこそ警察も武力行使をしなかったし、この事件の意味があるのだと思います。その後、市民の生活は落ち着きを取り戻し、西側資本も入ってきました。いまは国全体が改革と経済回復を目指していますが、共産主義体制の一掃は、一筋縄ではいかないようです。

## EUをかなり意識した授業

私とほぼ同時期に、ユーゴのベオグラード大学からシミヤノヴィッチ・イエレナさんという女性が中央大学に留学していました。彼女が来日したときは、私はまだ日本にいましたので、かなり現地情報をもりました。その代わり、彼女が帰国した時は逆に、私が現地で出迎える形になりました。私と彼女は交換留学生の仲だったのです。

ベオグラード大学——1万数千人

日本語科の恩師(左から2人目)と、その御家族と(中央が筆者)



の学生を擁する旧ユーゴでは最大規模の大学で、独立後も旧ユーゴ出身の学生が多く在籍しております。

意外だったのは、授業の内容がヨーロッパ全域を統合するEUをかなり意識していることです。冷戦時代は東側陣営だったのに、こういうところからも冷戦崩壊が感じられました。コースは行政、国際関係、ジャーナリズムに分かれています。バルカンの人々はお客さんをもてなすことが大好きです。セルビアの

お母さんたちは本当に料理上手です。週末ともなると、朝から昼の3時まで、食事の用意をしているというところもしばしばです。十分食べたので

## 友人にも妥協しない

日本の友情と異なる点は、なんでも自分の意見を正直にいうところ。例えば、日本人でも考え方の違いははっきり主張する人もいますが、セルビア人は他人の服装についても意見をいいます。時には余計なお世話だと思いますが、腹を割って何でも話し合う関係は、見習うべきだと思います。近所付き合いも盛んで、見知らぬアジア人の私にも気楽に声を掛けてくれます。

初めはセルビア語で挨拶ぐらしかできなかった私が、どうやらコミュニケーションを図れるようになったのは、まったく彼らのお陰です。自分が逆の立場だったら、こんなに温かく接していただけるものかと考えるとまったく自信がありません。大事なのは「言葉ではなく、心」だと思えました。異国で独りで暮らすことは、本当に心細いです。しかし、

ハシを置くと、もっと勧められます。3回断られるまで、食事を勧めるのがセルビア流のホスピタリティです。

日本人は外国人に冷たいと、よくいわれますが、言葉が通じないからというの理由にならないことを実感しました。

現地で活躍している日本人もいます。一度、イースターの日に難民キャンプに行きました。日本と現地のNGOが合同で開催したのですが、難民の子供たちに、日本の子供たちからのプレゼントを贈りました。そこにはNATOの空爆で発がんしている子供もいましたが、貧困、恐怖、劣悪な生活環境と闘っている彼らも、プレゼントを手にしたときの笑顔は、日本の子供とどこも変わりませんでした。

一般的に日本政府のユーゴに対する姿勢は、評価を受けているようです。日本の人気もなかなかです。街で『忍者』というセルビア語の本を見つけた時はびっくりしました。